

序論

昨日は、青年宣教シンポジウムが蛍池でありました。みなさんのお祈りに覚えてくださり、感謝でした。無事に守られ、終えることができたことを、神様に感謝します。

はじめは、青年たちがたくさん集まる、青年たちのためのシンポジウムかと思っていましたが、そういうわけではありませんでしたね。

昨日集まってくくださった方たちは、青年たちのことを考え、なんとか青年たちに伝えたいという思いを持ってくださる方々でした。蛍池からも何人も参加してくださったことは、本当に感謝なことだと思いました。私は裏でいろいろ対応しながら聞いていたので、ところどころ聞けたり聞けなかったりでしたが、「青年たちに任せることと、でも任せきりにせずに気に掛けることが大切だ」と講師の西村先生が語ってくださっていたことが心に留まりました。その後、今日の準備をしながら、考えてみれば新約時代の教会もそうだよなあと思われました。

パウロは、伝道旅行をしながら、行く先々で教会をたて上げ、そして現地の人たちに任せて、次の場所に伝道に行っていました。それは、任せたというよりは、いろいろな事情の中で押し出されるようにして次のところへ向かわざるを得なかったと言った方が、実情には合っていたかもしれません。しかし、パウロは次の場所へ行っても、各地に残してきた生まれたての信徒たちのことを気にかけていました。使徒の働き15:35では、パウロが「先に主のことばを宣べ伝えたすべての町で、兄弟たちがどうしているか、また行って見て来ようではありませんか」と言っています。パウロの2回目の伝道旅行の目的は、各地に残してきた信徒たちのことをねぎらい、励ましに行くことでした。

また、新約聖書の中には、たくさんの書簡が残されています。それらの手紙の中で、同じ信仰を持つ兄弟姉妹を気にかけて、必要な励ましや、気をつけるべき偽の教えなどについて書き送っています。

ヨハネの手紙が書かれたころ

今、ともに学んでいますヨハネの手紙もそんな手紙の中の一つです。残念ながらヨハネ第一の手紙の宛先が、具体的に誰なのかははっきりしませんが、ヨハネはその人たちのことを「私の子どもたち」(2:1)と呼びかけるほどに気にかけて、親しく感じていたのでした。これから見ていこうと思っていますが、今日の箇所でも、「子どもたち」、「父たち」、「若者たち」と呼びかけながら、手紙を綴っています。

ヨハネの手紙が書かれたのは、ヨハネの生涯の晩年の頃であると言われています。12弟子の中で一番若かったヨハネを残して、年長の弟子たちはすでに天に召されていきました。ヨハネも、もうかなりの年となり、イエス様と直接会ったことのある世代の人々もほとんどが、世を去ってゆきました。イエス様が十字架にかけられた頃、恐らくヨハネは20歳そこそこの若者でした、そのヨハネが90才くらいになっていたと言われていいますから、だいたいイエス様が天に帰られてから70年くらいが経っている頃に、この手紙は書かれたと考えられています。

70年もすれば、時代もすっかり変わります。かつて御霊の働きによって広がっていった教会も、内側からも外側からも攻撃を受けるようになりました。キリスト者の存在が、ローマ帝国の中でも無視できないものとなるにつれ、いろいろなうわさが広まり、当局から目を付けられるようになり始めていました。

私たちは、イエス様のことを「主」と呼びます。それは、当時のクリスチャンたちが、ユダヤ教で神様のことを「主」と表現することに則って、「イエスは主」ですと告白していたことに遡ります。この「主」という言葉は、ギリシャ語では「キュリオス」といいますが、もともとは「主人」という意味の言葉です。家の主人を指すときや、奴隷が自分の所有者を呼ぶときに使われていた言葉でした。

ところが、イエス様の少し後の時代のローマ皇帝カリギュラの頃から、「キュリオス」という言葉がローマ皇帝に使われるようになってゆきます。そして、遂にはドミティアヌス帝の時代には、「ローマ皇帝はキュリオスにして神」と言われるようになります。こうして、ローマ皇帝は神格化されていきました。ヨハネの手紙が書かれたのは、ちょうどこのドミティアヌス帝の時代のころになります。このドミティアヌス帝は、皇帝崇拜を強要した皇帝でした。「イエスは主(=キュリオス)です」と告白するクリスチャンたちにとって、神格化されたローマ皇帝を「キュリオスにして神」ということは、あり得ないことです。ですから、もちろん彼らは皇帝崇拜を拒否し、退けます。ドミティアヌス帝は、それ故に、クリスチャンたちを激しく迫害しました。一説によると、ヨハネが黙示録を記したパトモス島に流されたのは、このドミティアヌス帝による迫害の時であったとされています。

ヨハネが伝えたかったこと

この頃は、迫害が起こりつつある予感と不安に、教会が置かれていた時代でした。ヨハネは、そんな時代に生きていたキリスト者たちに、「子どもたち」、「父たち」、「若者たち」と呼びかけました。しかも、その呼びかけを2回繰り返しています。ヨハネには、彼らに分かっていて欲しいことがあったからです。それは、キリスト者がイエスの名によって罪が赦された者であるということ、神を知る者となったのだということ、そして世の悪に打ち勝った者であるということでした。ヨハネが手紙を書いたのは、彼らにそれを伝えたかったからです。

ここで、「子どもたち」や、「父たち」、「若者たち」をどう解釈するかですが、文字通り年齢的な意味での区分と考えるのはほかに、信仰の成熟度によって区分しているのだと捉える、解釈の仕方があります。つまり、「子どもたち」というのは、「信仰の子どもたち」、「父たち」とは「信仰の父」という具合に、それぞれの言葉の頭に「信仰の」という形容詞を付けて解釈していくようなやり方です。私もそちらの方が自然な解釈だと思います。若くても「信仰の父」のような人はいますし、大人であっても「信仰の幼子」のような人はいるものです。

面白いことに「父」や「若者たち」は、2度目も同じことばが使われていますが、「子どもたち」だけは、14節になると「幼子たち」と言い換えられています。どちらも小さな子供のことですが、12節の「子ども」というのは「子どもである」という身分のことを差すのに対して、「幼子」は子供が幼い状態にあることを意味しています。

ヨハネは、12節で「信仰の子どもたち」に対して「私があなたがたに書いているのは、イエスの名によって、あなたがたの罪が赦されたからだ」と書きました。まさに、神の子の身分とされた「信仰の子どもたち」は、イエス様のお名前によって罪ゆるされた者たちです。

そして、「信仰の幼子たち」とは、「御父を知るようになった」ばかりの者、信仰において幼いものです。

次の「信仰の父」は、1度目も2度目も全く同じ表現になっていて、「初めからおられる方を知るようになった」と、されています。信仰の幼子と比べると、単に父なる神さまを知ることから、御父が「初めからおられる方である」ことを知るようになり、御父に対する理解が進んでいます。

そして、「信仰の若者たち」は、幼い信仰から成長をとげ、いよいよ活力に満ち始めて、「悪に打ち勝った」人たちです。1度目は、単に、「あなたがたが悪者に打ち勝った」と言われているだけですが、2度目には「あなたがたが強い者であり、あなたがたのうちに神のことばがとどまり」という説明が加えられています。神のことばを自分のうちにとどめていたことが、彼らの強さであり、それによって悪い者に打ち勝つことができたのです。信仰者の強さは、神のことばをどれだけ自分のうちにとどめられるかにかかっています。それは単に、記憶にとどめるということではなく、自分の中でみことばがしっかりと根を張り、実を結んでいるということです。

イエス様は、種まきの例えで、道端に落ちた種が鳥に食べられてしまうことを解説されたときに、「だれでも御国のことばを悟らないと、悪い者が来て、その人の心にまかれたものを奪います。」(マタイ13:19)と言われました。そして「良い地に蒔かれたものとは、みことばを聞いて悟る人のこと」(マタイ13:23)だと教えておられます。

また、岩地で干からびてしまった種については、「みことばを聞くが、この世の思い煩いと富みの誘惑がみことばをふさぐため」(マタイ13:22)だと、解説してくださいました。

世にあるものを愛してはいけません

ヨハネが続けて手紙に記しているのは、「世も、世にあるものも愛してはいけない」という忠告の言葉です。ここでヨハネは、「世も世にある者も愛してはいけない」理由を3つ挙げています。

理由の一つ目は、「世を愛するか、それとも御父を愛するかは両立しないから」です。ヨハネは、「もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません」とまで言い切っています。そう言うと、厳しすぎるように聞こえたり、極端な考え方であるように思ってしまうかもしれませんが、実はイエス様も同じようなことを言われたことがありました。それはマタイ6:24のみことばです。「だれも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじ他方を軽んじることになります。あなたがたは神と富とに仕えることはできません。」イエス様は、ヨハネの言う世と世にある者の代表として、「富み」を挙げて、人はどちらか一方にしか使えることはできないと教えています。神を愛するか、神以外のものを愛するかのどちらか。神に仕えるか、神以外の物に仕えるかのどちらかなのです。

二つ目の理由は、「すべて世にあるものは御父から出るのではなく、世から出るものだから」です。肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出たものではなく、世から出たものだから、それらに従うということは、神以外のものに従うということであり、それらを愛するとは、神以外のものを愛することになります。

イエス様は、「あなたの宝のあるところ、そこにあなたの心もある。」(マタイ6:21)と言われた時、「からだの明かりは目です。ですから、あなたの目が健やかなら全身が明るくなりますが、目が悪ければ全身が暗くなります。」(マタイ6:22)と、まず目から入って来るものに注意するようと言われました。ヨハネの言う「目の欲」ですね。私たちの目がどこに向けられ、心が何に向いているのか、それが私たちをどこに向かわせるのかを決めます。

そして、理由の三つ目は、「世と、世の欲は過ぎ去るから」です。イエス様も、宝を地上に蓄えるのはやめて、天に蓄えるようにと言っておられます。(マタイ6:19-20)地上の宝は、朽ちてしますからです。それは、主イエスの名によって罪ゆるされ、キリストにあって世に勝利している者にふさわしいものではありません。主イエスを愛し、主イエスに従うとき、私たちは永遠のいのちの祝福に与り、私たちの国籍は天に移されているからです。

今は終りの時

18節でヨハネは、幼子たちに向けて、「今は終りの時」について語っています。「反キリストが来るとあなたがたが聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。それによって、今は終りの時であると分かります。」と、そう述べています。

反キリストが現れるということは、多くの惑わしが、世に現れているということです。ここでヨハネが「幼子たち」に向けて語っていることに注意してください。「信仰の幼子たち」は、御父を知るようにな

ったばかりで、反キリストのような惑わしにまだ免疫のない彼らのことをヨハネは気にかけていました。

最近、世の中で起きていることを見聞きしていると、さまざまな災害が私たちの住んでいるこの世界を覆っているように感じます。大きな地震も増えました。天候の不順も今では災害レベルに感じられます。しかしそれ以上に恐ろしく感じるのは、人が起こす災いです。最近、犯罪の質が変わってきたように思います。見境のない強盗事件が急激に増え、誰が狙われるか分からないようになってきました。若者たちが、簡単に犯罪に手を染めてしまっているかのような印象を受け、今、この社会で何が起きているんだろうと、心配になります。昨年来の戦争の影響が、多くの国や私たちの生活に及んでいます。イエス様が教えてくださった、終りの時の徴（しるし）が、いま世の中に起きつつあるように思います。そして、これからどうなってしまうのだろうかという不安の空気が、世の中に漠然と広がっているのではないかと、考えてしまいます。

ヨハネがこの手紙を書いた時も、教会は自分たちをとりまく世の中の様子が変わっていったことをひしひしと感じていたことでしょう。迫害を予感させる出来事が起こり、それが迫っていることを感じていました。

そういう中でヨハネは、自分の愛する者たちに、みことばにとどまることを教え、主イエスによって罪ゆるされるという恵みに与っていることを思い起こさせました。ヨハネは子どもたちや幼子たちに、父たちに、若者たちに、それぞれのレベルに応じて、自分たちが御父をどのように知っているのかを思い起こさせようとしているように思います。

また、15節から17節では、世にあるものではなく、世から出るものでもなく、御父からでるもの、ひいては御父である神ご自身に目を向け、愛するようにと促しています。

今朝のみことばも、前半、後半に共通しているのは、ヨハネが父なる神様を知ること、父なる神様に目を向けることへと人々の意識を向けさせていることだと思います。

終りの時にこそ、これらの事が大切です。

お祈りしましょう